



令和5年 No. 83  
春ひがん号

# あきばさん

## 春彼岸の到来

コロナ禍収束に向かつて

当山住持

暑さ寒さも彼岸までの「春彼岸」の到来です。

今年の春彼岸は、世界中を、日本中を恐怖と不安に苦しめた新型コロナウイルス感染症もようやく収束の兆しを見せ、世界の人びとの人生が平和な日常生活に向けて動きはじめたようです。

さらに、日本の春を代表する桜も開花し、爛漫な春が感じられます。お彼岸は、一年を通じて春秋の好時節に毎年必ずやってきます。日本人にとって、年中の国民行事といえましょう。

人生は、毎日毎日、毎月毎月、毎年毎年、四六時中、喜怒哀楽、山谷の日常生活がくり返され、過ぎてゆきます。この苦楽の人生にあって、私共は如何にして、世のため、人のため、家族・自分自身のために、平和な理想の世界である彼岸の境地に忍耐強く努力精進して生かされていくかが、人生の大切な意義・目的です。

発行人／発行所  
秋葉山 新井 寺  
272-0144  
千葉県市川市新井  
1丁目9の1  
電話047-357-8319  
FAX047-357-8399  
mail: info@shinseiji.jp  
http://www.shinseiji.jp  
郵便振替00150-2-282968

お彼岸のたびにご案内し、布教教化しております通り、仏教的には、お釈迦様は彼岸の世界に到る修行、勉強法として「六波羅蜜」の教えを説かれています。人びとは皆、仏教に、信仰の世界に、平和と安寧を願い、求めて生かされています。どうぞ、自分自身、ご家族、ご縁の皆様方の人生が少しでも心豊かに、平和でありますよう、この「六波羅蜜」の教えを、お互いに半歩でも一歩でも実践し、切磋琢磨されてはいかがでしょうか。

願わくは  
この功德をもって普く一切に及ぼし  
われらと衆生と皆共に  
仏道を成ぜんことを

合掌

### 六波羅蜜

彼岸へ到る修行の徳目

- 布施 (見返りを求めない施し)
- 持戒 (教えを実行し他者を思いやる)
- 忍辱 (耐え忍ぶこと)
- 精進 (たゆまぬ努力)
- 禅定 (ブレない心)
- 智慧 (真理をみきわめる)

## 梅花流詠讚歌に学ぶ瑩山禅師様

## 七〇〇回大遠忌にちなんで

## ●大遠忌とは

それぞれの宗派を開かれたお祖師様や大本山の発展に深くかかわったお祖師様の報恩法要を「大遠忌

」と呼びます。五十回忌以降は、五十年ごとに特別な法要が営まれます。明年、二〇二四年は、太祖瑩山禅師様の七〇〇回大遠忌を迎えます。

瑩山禅師様は、大本山總持寺を開かれ、道元禅師様・歴代のお祖師様方によって連綿と受け継がれてきたお釈迦様の教えを全国に広めて、こんにちの曹洞宗の礎を築かれました。



たいそじょうさいだいし けいざんぜんじ  
太祖常濟大師 瑩山禅師様  
「三尊仏」むかって左のお祖師様

鎌倉時代後期、疫病や戦乱など、混迷

する困難な時代に、「和合」の心

で、身分や性別などの区別なく、あまね

く人びとを救われ、わたしたちの心の支

えとなる多くの教えを遺してください

ました。一三二五年に六十二歳で(五十八

歳説もあり)遷化(せんげ・亡くなること)さ

れていきます。

大遠忌にちなみ、本年から明年にか

けて、大本山總持寺をはじめ、国内外の

曹洞宗寺院では、瑩山禅師様への報恩

法要・行持がつとめられます。そこで、

本誌においても、そのご生涯や教えを、

とくに梅花流詠讚歌の歌詞を通じて改

めて学び、禅師様の御遺徳をお偲びし

たいと思います。今回は、ご生誕からご

出家までを学びます。

## ◆太祖瑩山禅師誕生御和讃

(一) 此の世の人を救うべき

良き子をわれに授けよと

真心こめて母ぎみは  
観音菩薩にいのらるる

(二) 時しあたかも母ぎみは

越路の旅におわしけり

因縁も深く御名をば

行生磨と呼びたもう

(三) 誓願かないて生まれしは

世にもめでたき御子にして

救世の御姿おのずから

そなわりたもうぞ有難き

ご生誕の様子がお唱えされています。

瑩山禅師様は、鎌倉時代、文永元(一

二六四)年十月八日(陽暦十一月二十一日)、

越前国(福井県)にお生まれになりました

た(一二六八年誕生説もあり)。瑩山禅師

様の母ぎみの名前を「懐観大姉(えかん

だいし)」といいます。懐観大姉が三十七

歳のときのことでした。

懐観大姉は観音様の信仰が深く、懐妊

すると、毎日毎日、観音様を念じて礼拝

し、『観音経』を読んで観音堂をお参り

しました。そして、世のため人のためになる人になるようにと、お腹の子どもの成長を祈られたのでした(一番)。



真心こめて母ぎみは  
観音菩薩にいのらるる

懐観大姉が出産のために産屋（観音堂）に向かう途中に瑩山禅師様がお生まれになったことから、「行生（ぎょうしよう）」と名づけられました（二番）。瑩山禅師様は、母懐観大姉の観音様への願行によって誕生されたのです。「観音様の授け子」ともいえます。日本に仏教が伝わって以来、観音様は多くの人びとに親しまれ、心のよりどころとして信仰されてきました。その観音様のお慈悲のもとに誕生された瑩山禅師様は、母のおもいも通じ、その慈悲の念を生きとし生けるすべての人びとのしあわせのために役立てよう（衆生済度…しゅじょうさいど）と誓願されることになるのです（三番）。

### ◆太祖瑩山禅師修行御和讃（菩提）

(一) みほとけを

おろがみまつりうるわしき

春もやよいの越しの山

道を求めて八つの齡

名を紹瑾とあらためぬ

この曲には、幼少時代、修行時代のエピソードがお唱えされています。

信仰心の篤い母ぎみの慈愛のもとに育てられた瑩山禅師様は、母の姿を見て、幼い頃から仏道への志を募らせていたといえます。石を積んで宝塔を建てたり、土をこねて仏像をつくったりして遊ぶ少年だったようです。その様子が、「〈拝みたてまつる〉」と詠われています。

六歳の頃には出家の意思をかためられ、両親に願いでも許されず、断食をしてその決意のほどを示されたと伝えられます。そして、文永八（一二七二年）、八歳の春、永平寺に上られるのでした。永平寺で最初にお会いしたのが、生涯の師となる徹通義介禅師様（一二一九～一三〇九）でした。

瑩山禅師様の母方の祖母明智優婆夷は、道元禅師様に参禅された信心の深い在家信者でした。義介禅師様も道元禅師様に師事し修行されていますから、お二人は旧知の間柄であったことがうかがわれます。

当時、義介禅師様は五十代半ば。瑩山禅師様を僧侶として育てる知識もご経験も豊富であったことでしょう。しかし、義介禅師様は老齢のお母様への孝行の思いが深く、お母様の養護のために、瑩山禅師様の養育は永平寺第二代孤雲懷辨禅師様（一一九八～一二八〇）に託されることとなります。そして、義介禅師様のすすめで懷辨禅師様について正式な僧侶となり（得度）、「行生」から「紹瑾」と名を改められました。瑩山禅師様は、懷辨禅師様の最後のお弟子様となりました。建治二（一二七六）年二月、十三歳のときのことでした。

以後、瑩山禅師様は、求道の志をさらに深くされ、仏道修行にいよいよ邁進されていくのでした。そのご修行の様子については、次号にて。

つづく  
(副住職しるす)

## みなさまへ



## ◎ 月例行持を再開します

コロナ禍により、月例行持(坐禅会・写経会・梅花講)お休みさせて頂いておりましたが、社会的にもさまざまな規制が緩和されはじめたことを受け、まもなく再開の予定です。再開にあたりましては、引き続き、マスク着用・消毒などの感染対策を行なってまいります。皆様のご理解とご協力のほど、よろしく御願ひ申し上げます。

再開の時期など、くわしくは、お気軽におたずねくださいませ。

皆様のご参加をお待ちしております。

## ◎ 振替口座をご活用ください

新井寺では、ゆうちょ銀行の振替口座を開設しています。どうぞ、ご利用ください。

記号番号 振替 00150-2-282968

これからのしんせいじの行持  
どなたでも参加いただけます

三月二十一日 春ひがん法要

四月八日 釈尊降誕会

六月九日 先代住職報恩忌

七月十六日 おせがき法要

九月二十三日 秋ひがん法要  
十一月十八日 秋葉火坊大祭  
十二月八日 釈尊成道会  
十二月三十一日 年越し坐禅会

※ 変更や中止となる場合があります

● 月例坐禅会

● 月例写経会

● 梅花講(御詠歌)月二回 午前九時半

※ 月例行持の日時は おたずねください

## 令和五年 年回供養表

|      |             |
|------|-------------|
| 一周忌  | 令和四(二〇二二)年  |
| 三回忌  | 令和三(二〇二一)年  |
| 七回忌  | 平成二九(二〇一七)年 |
| 十三回忌 | 平成二三(二〇一一)年 |
| 十七回忌 | 平成一九(二〇〇七)年 |
| 二三回忌 | 平成一三(二〇〇一)年 |
| 二七回忌 | 平成九年(一九九七)年 |
| 三三回忌 | 平成三年(一九九一)年 |
| 三七回忌 | 昭和六二(一九八七)年 |
| 四三回忌 | 昭和五六(一九八一)年 |
| 四七回忌 | 昭和五二(一九七七)年 |
| 五十回忌 | 昭和四九(一九七四)年 |
| 百回忌  | 大正一三(一九二四)年 |

## 編集後記



坐禅のつとめばかり深切まことありて、ひまの時はいたずらなりと、おぼしめし候は、きわめたる用心のたがうことにて候。

大智禪師『十二時法語』

『十二時法語』には、一日二十四時間の生き方、その心がまえが示されています。禅宗において、坐禅は大切な修行のひとつです。しかし、坐禅ばかりを一生懸命に行ない、それ以外はおろそかにするということは、道にかなっていない。すなわち、どんなことにも、真摯に、心を尽くして、ていねいに向きあうことの大切さが説かれているのです。

WBC(ワールド・ベースボール・クラシック)が開幕し、侍JAPANの快進撃が報道される一方で、野球だけを大切にしているのではなく、人にも、ものにも、行ないにも、日常生活の何気ない一つひとつもおろそかにしない選手たちの姿がしばしば伝えられていました。選手たちのそういう姿が、侍JAPANの強さにつながっているのだらうと、大智禪師の教えの深さを改めて学ばせていただいたおもいです。

春の好時節 ご自愛くださいませ。